様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３０１０２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２１６３２

研究課題名（和文）近世翻訳受容と明治初期英文学受容の連続性：翻訳研究からの考察

研究課題名（英文）Translation/Adaptation in the late Edo and English literature in the early Meiji: From the perspectives of Translation Studies

研究代表者
佐藤　美希（Sato, Miki）

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：５０５０７２０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世白話小説受容が原文に忠実な受容から翻案的なあり方に変化した様相を、翻訳学の理論である多元システム論を用いて、当時の散文文学ジャンルとの関係から把握し直した。さらに、「翻訳」「翻案」の概念が近世から近代初期でその意味が異なる点を論じ、その背景には、西洋文学受容が盛んに行われる中で形成された翻訳規範、近世戯作文学の伝統から写実を重視する近代小説への移行、さらに言文一致運動も含めた明治20年頃の日本の文学状況の重要な変化が関連したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題を通じて、時代や分野別に細分化される傾向がある文学研究を翻訳学の観点から近世の外国文学受容を横断的に分析することができ、翻訳学が文学研究の一つの方法論として有効であることを示したと考えている。また、現在使われている「翻訳」「翻案」という概念が近世や近代初期とは異なっている点を明らかにしたことによって、いわゆる「翻訳」を定義し直す必要性を認識できた。これは、特に2000年代以降多様化を示す外国文学受容のあり方を把握する契機になるものである。

研究成果の概要（英文）：Using polysystem theory, an approach to translation studies, this study revisited the changes in the reception of Chinese vernacular novels in the early modern period, and revealed their relation to the other prose literary genres in the Edo era. It also considered the differences in the meaning of the concepts of ‘hon’yaku (translation)’ and ‘hon’an adaptation)’ between the Edo and Meiji periods, and clarified that these differences were related to major changes in the Japanese literary situation around the 20th year of Meiji, such as the translation norms formed amidst the active reception of Western literature, the shift from Edo literature to modern novels with an emphasis on realism, and the movement for genbun itchi (the unification of speech and writing).

研究分野：翻訳学、比較文学

キーワード：翻訳　翻案　翻訳学　翻訳研究　外国文学受容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究を挑戦的研究と位置づけたのは、第一に、英文学、白話文学、近世文学という主題が、これまではジャンルや時代、言語の枠組みに縛られて研究が断絶しがちであったことがある。柳田泉、前田愛、鈴木貞美のような時代／ジャンル横断的な重要先行研究はあるものの、多くの場合、文学研究はテクスト中心であることが前提とされ、テクストの言語への精通が求められるが故に、ジャンルや各国文学の枠組みを横断することは避けられてきた。

第二に、外国文学を主題化する場合、原典テクストの精読が大前提とされ、翻訳に主眼を置いて外国文学を論じることは文学研究ではほぼ異端視されてきたと言える。しかし、読者が外国文学を手にするのは基本的に日本語訳であるという事実を考えるとき、翻訳が果たす機能、翻訳に望まれる役割、出版側の翻訳観といった、受け入れる文化における翻訳という事象全体についての理解なしには日本の外国文学受容を把握できない。見方を変えれば、翻訳事象に着目することで、従来のように言語やジャンルの縦割りの枠組みに阻まれていた文学の横断的研究が可能になると考えられる。

一方、翻訳学（Translation Studies）の状況を鑑みても、日本の翻訳学がそうした文学事象の分野横断的なアプローチになり得る有効な例を示すことができていない。翻訳学が新しい研究分野として学術的に認知され始めているが、隣接分野、特に文学研究からは、翻訳テクストを中心に据えることをもって文学研究のアプローチとは見做されないという状況がある。その点で本研究は、近代英文学受容の背景を近世に拡大して白話文学受容から続く連続性を考察することで、翻訳への着目が文学事象の理解を進化させる好例となることを示すことを目指した。縦割りの枠組みに分断されずに、ジャンル／言語横断的な文学研究を示すことは、縦割りにとらわれない翻訳研究の可能性を示すという点で意義があると考えている。

２．研究の目的

したがって、本研究は、近世文学と近代文学、英文学研究と日本近世文学研究・白話文学研究、文学研究と翻訳研究といった、これまでジャンルや分野によって隔絶されてきた研究の接合を目指した。また、日本では翻訳学が文学研究と有機的に接合されていないのではないかという反省から、翻訳学独自の視点から文学研究に寄与できる方法論を提示することも目指した。

既存の縦割りの研究枠組みにとらわれることなく、翻訳という視座から、近世白話文学受容から戯作文学を通じて明治初期の英文学翻訳受容につながる一連の流れを明らかにし、それによって、英文学翻訳受容の背景を歴史的に理解すること、および、翻訳学に依拠して文学受容を分野横断的に理解できるアプローチを確立することを最終的な目的とした。

３．研究の方法

本研究は文献研究を中心とし、二つの段階に分けて研究を進めた。

（１）　江戸中期における中国白話文学受容の諸相の考察
①　白話文学受容に関わる先行研究のまとめ
②　通俗軍談から初期読本にいたる受容の様相
③　翻訳学の理論に依拠し、当時の江戸文学と白話文学受容との関連性を分析

この段階での論文執筆を通じて得られた知見を元に、当初の予定に修正を加えた。江戸期から明治初期、明治中期に至る「翻訳」「翻案」という概念形成やその変化をたどることによって、両時代の外国文学受容の連続性／非連続性を把握する方向に軌道修正を行った。

（２）　江戸中・後期から明治初期、明治中期へのいわゆる「翻訳」「翻案」という概念の検討
①　江戸期の資料や先行研究を元に、当時の「翻訳」「翻案」の用語使用を検討
②　明治初期～中期の資料を元に、当時の「翻訳」「翻案」の用語使用とそのコンテクストを検討

使用した史資料は、江戸期のものはオンラインのデータベースを中心とし、明治期のものはオンラインのデータベース及び明治文学関連の全集などを利用した。

４．研究成果

（１）　上記３－（１）について、

① Conference on “Homo Translator: Traditions in Translation” (The Nanzan Institute for Religion and Culture, Nanzan University, July 2019) において、’Translating China and the West: Literary Translation/Adaptation in the late Edo and the early Meiji.’と題する研究発表を行い、江戸中～後期の白話文学受容から後期の戯作文学の発展と明治初期の戯作者による西洋文学翻訳に至る流れと先行研究のまとめを行った。

② 白話小説受容の一つの形態であるいわゆる「通俗軍談」の作品群が、時代と共に原文に忠実な内容から次第に翻案的なあり方に変化したことは先行研究で既に明らかにされているが、その様相を翻訳研究の理論である多元システム論を用いて、仮名草子や浮世草子、軍記物語などとの力関係が大きく影響したことを明らかにした（論文「多元システム理論による近世初期白話小説受容の検討」『通訳翻訳研究への招待』第 23 号、2021、47-69. 単著）。

③ 江戸中期の白話文学受容から後期の戯作までの作品創作の流れは、江戸後期の読本文化の確立に照らして近世文学の意義として説明されてきたが、それらが白話文学の翻訳／翻案であることが自明視されていながら、例えば翻訳／翻案の具体的な区別の基準は曖昧であり、その区別が必要なのかどうかという疑問がさらに明らかになった。この区別については、明治以降の近代における翻訳文学のみを考察していた時には着目できていなかった点であり、近世と近代をつなぐ意義としても大きい。

このように、近世の白話文学受容の様相をまとめる作業を通じ、翻訳と翻案の境界線をどのように把握するかに関して新たに気づくことが多く、近世文学と明治初期英文学翻訳の研究とを接合するためには、文学研究の視座に加えて翻訳学の理論や概念によって新たな考察を付与できる具体性が明確になった。

（２） 上記３－（２）について

① 近世の外国文学受容を「翻訳」「翻案」という用語を用いて議論する上での問題点を明らかにした。この二つの用語は近世においては用いられていない概念であり、現代の概念では当時の外国文学受容を論じるには不十分であることと、さらにこの二つの用語を定義し直す必要性と可能性について、近世の白話文学受容を一例に翻訳研究の概念に基づいて論じた（学会発表 ‘Reconceptualising “Translation”/ “Rewriting”: examples from the early modern Japan.’ 7th International Association for Translation and Intercultural Studies Conference, 14-17 September 2021, Universitat Pompeu Fabra, Barcelona, Spain, on site and on line）。

② 上記①で得られた知見に基づき、現在の翻訳・翻案概念がどのように構築されているのか、またそれらを再検討する余地はないのか、という研究課題にも取り組んだ（「文学作品の「翻案」と「翻訳」を再考する」『文化と言語』第 85 号／札幌大学研究紀要 学系統合号第 1 号』、2021、71-96. 単著。「2000 年代以降の文学の<翻訳>概念」『文化と言語』第 87 号／『札幌大学研究紀要』第 3 号、2022、125-153.単著）。

ここでの考察は 2023 年に採択された科研費研究（基盤 C「21 世紀の文学翻訳における翻訳概念の更新」）に繋がるものとなった。

③ 近世から明治初期にかけての「翻訳」「翻案」の概念が明治中期に大きく変容していったことを明らかにし、そこに江戸と現在における特に「翻案」についての認識に大きく隔たりがあることを明らかにした。明治中期にいわゆる「翻訳」「翻案」という現在使われている概念が確立した背景には、西洋文学受容が盛んに行われる中で形成された翻訳規範と、近世戯作文学の伝統から写実を重視する近代小説への移行、さらに言文一致運動も含めた明治 20 年頃の日本の文学状況の重要な変化があり、それらが外国文学受容観を大きく変容させたことを考察した（‘The Conceptualisation of *Hon’an* (Adaptation) in Edo and Meiji Japan.’『通訳翻訳研究』第 22 号、2023、17-29.）。

近世の白話文学受容のありかたが現代の「翻訳」「翻案」という概念から考察されてきたことについても、これらの概念は明治中期以降から現代の研究によって確立されたもので、近世や明治初期の外国文学受容の様相を必ずしも適切には記述できていないのではないか。翻訳学の視座から、そうした点を補完できる可能性も示すことができたと考えている。

（３）研究全体として

本研究を通じて、翻訳学の観点から近世から近代への外国文学受容の様相を検討し、時代や分野別に細分化される傾向がある文学研究を〈翻訳〉という切り口で横断的に分析することができたと考えている。本研究で近世と近代の翻訳受容の連続性／非連続性を把捉する試みの中で、いわゆる「翻訳」「翻案」という概念に当てはまらない外国文学受容のあり方が、現在の翻訳観や受容の理解にも繋がり得ることも明らかになった。これは 2023 年度から取り組む科研費研究の新たな研究課題となっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 佐藤美希	４．巻 第23号
２．論文標題 「多元システム理論による近世初期白話小説受容の検討」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『通訳翻訳研究への招待』	６．最初と最後の頁 47-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤美希	４．巻 第85号(第1号)
２．論文標題 「文学作品の「翻案」と「翻訳」を再考する」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『文化と言語』(札幌大学研究紀要　学系統合号)	６．最初と最後の頁 71-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤美希	４．巻 第87号（第3号）
２．論文標題 「2000年代以降の文学の<翻訳>概念」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『文化と言語』（『札幌大学研究紀要』）	６．最初と最後の頁 125-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 SATO, Miki	４．巻 第22号
２．論文標題 ‘The Conceptualisation of Hon’an (Adaptation) in Edo and Meiji Japan’	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『通訳翻訳研究』	６．最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 SATO, Miki
2．発表標題 "Reconceptualising ‘Translation’ / ‘Rewriting’: examples from the early modern Japan."
3．学会等名 7th International Association for Translation and Intercultural Studies Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 SATO, Miki
2．発表標題 "Translating China and the West: Literary Translation/Adaptation in the late Edo and the early Meiji"
3．学会等名 Conference on “Homo Translator: Traditions in Translation”（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 SATO, Miki
2．発表標題 ‘“Translation” and “adaptation” in the Edo and Meiji Japan.’
3．学会等名 The 4th East Asian Translation Studies Conference (EATS4)（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

‘Translation/Adaptation in the late Edo and English literature in the early Meiji: From the perspectives of Translation Studies.’ Impact, Volume 2022, Number 5, October 2022, pp. 43-45.

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関